

## 4 . やさしい育成技術

### 子馬の管理方法 ~ 1歳セリに向けての準備 その2 引き馬~

日本中央競馬会 日高育成牧場 専門役 頃末 憲治

今号は、前号の「子馬の管理方法 ~ 1歳セリに向けての準備 その1 手入れ~」の続編になります。セリにおける引き馬について解説していますので、ご一読いただければ幸いです。

#### 引き馬

セリでは、手入れの状態やトリミングなど見かけの良さに加えて、常歩での快活で力強い動作を自然にみせる馬には、競走馬としての将来的素質が感じられるために注目が集まります。セリ会場において、購買者から注目される馬は、歩様等の検査のために何度も馬房から引き出されます。そのような馬は、繰り返される展示の要求に対して、たとえ疲労があろうとも元気よく歩かなくてはなりません。また、歩様検査を行うときには、いつでも人の指示に従っていなくてはなりません。このときの歩様の印象は購買者に大きな影響を与えるために、いつでも力強く大きな常歩ができるように、馬をしつける必要があります。

#### 1 . 出生直後からの引き馬に対する意識

適切に引き馬を実施するためには、出生直後からしつける意識を持たなければなりません。この時期には、子馬を保持せずに母馬の後ろを自由に歩かせるようにしてはいけません。出生直後のこの時期は、子馬に様々なことを刷り込むのに非常に適した時期であるので、この時期から適切な引き馬を教えることが非常に重要になります。

出生直後から2週齢までの期間は、左手で母馬を引き、子馬は引き綱（以後はリードとする）を使用せずに右腕を子馬の肩から頸の位置にまわし、“面”で保定しながら自発的に歩かせます（図1）。御者が右腕で子馬の頸を軽く保持することによって、御者は自然に馬の肩~頸に位置できるようになります。このように出生直後のこの時期から、子馬に対して引き運動時の御者との位置関係を理解させることによって、1歳のセリ馴致時にスムーズな引き運動の実施が可能となります。



**図1 引き馬の馴致は出生直後から始まっています。**

右腕で子馬の頸を保持することによって、御者は子馬の肩に位置できるようになります。

## 2. プレッシャーとプレッシャー・オフの原則

子馬が立ち止まろうとした場合には、前述のように子馬の頸に回して保持していた右腕を一時的に解き、右の手のひらで子馬の肋部後方を軽くたたいて刺激することによって、前へ進む“扶助”を出します。そして、前に進んだ後には、再度右腕を頸に回しスピードを調節します（図2）。すなわち、“プレッシャー = 肋部後方の軽打”、“プレッシャー・オフ = 右腕での頸の保持”となり、プレッシャーとプレッシャー・オフの原則に基づき、子馬が自発的に、かつ子馬自身のバランスで歩行するように導きます。

馬とは、本来、作用に対して反抗しようとする動物であるために、引き馬を実施する際に、御者が馬の鼻端より前に位置してリードを引っ張って前進させようとする、反対に馬は反抗して後退しようとしています。引き馬を実施する際に重要なことは、馬を自発的に歩行させ、リードのプレッシャーがない状態、すなわちニュートラルな馬自身のバランスで歩かせ、プレッシャー・オフの状態にして、御者は馬に付いていくことです。これが引き馬の最終目標となります。



図2 引き馬の馴致は、プレッシャーとプレッシャー・オフの原則に基づきます。

### 3. チフニービットと引き馬

引き馬を実施する際には、チフニービットの使用が推奨されます。チフニービットはハートの形をした金属でできており、上縁を馬の口の中に入れます。下縁は下あごの周囲に位置し、この下あごの真下の金属部分に1本のリードを連結して馬を制御します。このチフニービットは欧州で一般的に使用されていますが、近年、わが国の競馬場のパドックでも、競走用ハミ頭絡の上から装着しているのをよく見るようになりました。しかしながら、チフニービットの特性が理解されていないのか、頬革に連結するハミの横部分に2本のリードを装着している場合が多いように思われます。

チフニービットを使用する場合には、2本ではなく1本のリードを下あごの真下の金属部分に連結して、より効果的に馬を制御しなければなりません(図3)。また、チフニービットのみを装着することなく、無口頭絡とともに装着し、リードを両方の下あごの金属部分に連結して使用するのが推奨されます(図4)。これによって、チフニービットへの直接的な作用を和らげ、さらにはチフニービットの前方への反転を防止できます。チフニービットが前方へ反転してしまうと、“この原理”で下あごを過度に圧迫してしまうために、馬は後退しようとし、このように、チフニービットとは御者が馬の肩の横に位置して使用することを前提にした馬装具であることを理解しなければなりません。



図3 チフニービットは下あごの真下の金属部分に1本のリードを連結して馬を制御します。

チフニーの効用：構造上、1本の引き綱を使用することで効果がある作用が強いことから、通常はソフトなコンタクトで使用する



図4 チフニービットは、無口頭絡とともに装着し、1本のリードを両方の下あごの金属部分に連結して使用します。

リードはチフニー下部の環と無口頭絡に連結する  
 チフニーと無口の両方に作用  
 直接的作用を和らげる  
 前方への反転防止

#### 4. 引き馬は「pull (引く)」ではなく「lead (導く)」

セリ馴致に向けて引き馬を実施する際には、御者のポジションが非常に重要になります。つまり、馬を「pull (引く)」のではなく、馬の肩の横に位置して、馬を「lead (導く)」ことが重要です。横から見ると、御者が馬の頭よりも後方に位置して、そこから馬に対して「前に歩く指示」を出すことによって、馬自らが前に向かって「意欲的に歩く」ことを覚えさせます(図5)。また、御者が馬の頭の位置よりも前や横にいと、引き手や御者の腕を噛んだりして遊ぶことを覚えさせる原因にもなります。

この御者と馬との位置関係は、騎乗馴致を行う際のダブルレーンを用いたドライビングとも似ています。ドライビングでは、馬の後方にいる御者が馬に対して前進する指示を出し、その前進氣勢をハミで受けて制御します。つまり、これは御者が馬に騎乗した際の位置関係と同様であり、引き馬で正しく馬を歩かせることは、その後の騎乗時の従順な走行にもつながっていきます。



図5 引き馬の原則は、『pull (引く)』ではなく『lead (導く)』になります。

#### 5. ウォーキングマシンの活用

馬の体力養成にも主眼を置き、快活で力強く歩かせることを目的として、引き馬とともにウォーキングマシンを併用することは非常に有効です。ウォーキングマシンの活用によって、馬自身に、物理的に速く歩くことを覚えさせることができます。

ウォーキングマシンのスピードは、個々の馬に応じて決定すべきですが、一般的には 5.5~6.5km/h で実施します。一方、ウォーキングマシンのみでは“人馬の約束事”を構築することができませんので、セリに向けての馴致時には、引き馬の実施は不可欠であることを忘れてはなりません。